

# 恩師列伝 ― 七人の侍



梶原 宣俊

はじめに

今年で七十四歳になる。生涯現役をめざしてがんばっているがどうしても過去の人生を振り返ることが多い。人生を振り返ってみると多くの人々に出会い、多くの影響を受け、今日まで比較的恵まれた幸せな人生だったとつくづく思う。そのなかでも特に大きな影響を受けた七人の恩師を振り返ってみたい。

一、小学時代 木村磯生先生 ― 「読む書く話す」が好きになる

私は、父親の仕事の関係で、小学校を四回転校している。福岡で三回、長崎で一回であ

る。小学最後の六年生の担任が木村磯生先生であった。

赤ら顔の恰幅のいい先生で、とても優しくかつ厳しく、私は初めて恩師と呼べる先生に出会った。その影響は極めて大きく私のその後の人生が決まったように思う。

まず、級長と図書館係をやるように言われた。毎朝、朝礼の司会をやらされた。図書館係は、毎日放課後司書のような仕事をさせられた。利用者は少なかったので、私は図書館の本を読み漁った。世界日本の偉人伝や、シヤロックホームズを読んでいた。読書の面白さを初めて知った。それまで漫画ばかりを読んでいたのだが、本に変わった。以後生涯読書好きになった。

ある日、先生が、明日は宿直なので、親の了解を得て、夜遊びに来てもいいよと言われた。私はすぐに手を挙げて、友人たちと泊ま

りに行った。職員室のストーブの上で、アサリを焼きながら食事をした。夜は宿直室で雑魚寝である。夏休み、先生が数人で家に遊びに来ていいよと言われた。私は早速、仲の良い友達と四人と自転車で、隣村に住んでおられた先生の自宅へ遊びに行った。

大きな農家で、先生はよく来たねと喜ばれ、「よし、みんなに鶏肉のすき焼きを創ってやる」と言って、鶏小屋にいき一羽の首を絞められた。私は、初めて見る残酷な光景に驚いた。さらに羽根をむしりとらされ、なんと残酷な先生かと驚いた。しかし、そのすき焼きは最高においしかった。

秋になると文化祭があり、うちのクラスは演劇をやるからと言われた。「運命の鐘」という劇で内容は忘れたが、私は主人公の少年役をやり、先生は老人役を演じられた。最後の場面で、老人と少年が語り合うところで、先

生は涙を流しながら演じられた。私はその場面が生涯忘れられない。私は演劇という芝居で本当に涙が流せることを初めて知ったのである。

卒業式で、先生は一人に一人にふさわしい言葉を添えて絵入りの色紙を送られた。私には、「強く美しく」と書いたあざみの絵が贈られた。私はひ弱で青白き少年であった。これは生涯の目標となった。大学生の時、先生の早逝を知り、私は葬式にかけた。あのすき焼きを食べた座敷の位牌に手を合わせると涙があふれて止まらなかった。

木村先生は、人生の恩師で、その後の私の人生に大きな影響を与えることになったと思う。先生は宮沢賢治の詩が好きであった。私は、この先生のおかげで「読む・書く・話す」ことが好きになり、生涯続けることになった。今から考えれば、敗戦後の日本の小さな片田

舎にこのような素晴らしい教育者がいたことを私は幸運に思う。

## 二、中学時代 坂本先生 — 英語が好きになる

残念ながら中学時代には恩師と呼べるほどの先生に出会うことはなかった。中学から戦後の受験ブームが始まっていた。私は、英国土社という3科目が好きで、理数は苦手であった。

あまり受験勉強をした記憶はないが、田舎の小さな中学であったからいつも一番であった。このころから中間、定期試験の結果を貼り出すことが始まった。これが私にとっては良くない影響を与えたと思う。大して努力しなくてもいつも一番なのである。

特に英語が好きで、英語クラブにはいり英会話の勉強をした。坂本先生が担当で発音もよかった。私は小六から米軍板付基地の放送

を聞いていたので発音には慣れていた。一番病になり、小山の大將病になった。「井の中の蛙大海を知らず」である。

## 三、高校時代 吉永先生 — 英語劇と太宰にはまる

一番近くにある福岡県立高校に入学した。最初にあつた実力試験で一氣に一二〇番になった。この高校は九州大学の予備校みたいな学校で、修猷館高校と九大の入学者数を競い合っていた。授業内容が九大の入試問題で、私は受験教育に猛烈に反発するようになった。私は、秋の弁論大会で、教育基本法を取り上げ、現実の受験教育を痛烈に批判した。しかし、教員や学生からは何の反応もなかった。私はESSに入り、実践的な英会話力に力を入れた。その担当の先生が吉永先生である。夜間の教員であった。大学を卒業したばかりの若い先生で、発音もよく何より受験英語か

ら自由であった。

私たちESSは、日曜日には板付基地の家庭を訪問して子供たちをつかまえて実践的な英会話を学び、中州の映画館に行き二回同じ映画を鑑賞した。一回目は映画を楽しみ、二回目はできるだけ字幕を読まずに鑑賞した。

秋の文化祭では、英語劇を披露した。私はちょうど部長に選ばれ、シエークスピアの「ベニスの商人」と「ハムレット」をやることを提案し、認められた。私は厚かましくも、演出と主役をやらせてもらった。この体験は、高校三年間の最大の思い出であり、部員の結束も固く、未だに同窓会が続いている。わたしにとっても、高校最大の思い出であり、充実した青春であった。

クラブで遅く帰り、田んぼのあぜ道を歩いて帰りながら私は初めて、生きているという充実感を実感していた。夕焼けが美しく輝い

ていた。

英語好きが高まり、私は本気で米国留学を考え始めた。当時、ESSの先輩が二人、AFSで米国留学をしていた。私は親にその希望を伝えた。しかし、猛烈に反対され、私は泣く泣く留学をあきらめた。しかし、その時から私の初めての反抗が始まった。私は何も悪いことを望んだわけではない。親が私の人生の敵として変貌した。私はそれから徹底的に親に反抗し、家族という保守の牙城を呪い始めた。ちょうどその時期に、図書館で太宰治の「人間失格」に出会った。太宰の繊細な感性と「家庭の幸福は諸悪の元」という言葉に共感した。それから太宰ファンになりすべでの著作を読み漁った。

#### 四、大学時代 岩永久次先生 — セツルメントと太宰論

やがて私は、大学進学の時期になり、親が

地元の大学の理工系を薦めたが、断固として反対し、熊本大学法文学部に進学した。来ななくていいと言うのに、母親がついてきた。私は、母を駅まで送り、下宿に帰り、万歳を叫んだ。夏休み等も帰省することはなかった。ついに百パーセントの自由を手に入れ、自由を満喫した。

しかし、大学の講義は、まったく面白くない。前期までではまじめに通学したが、行くのをやめた。毎日全くの自由で、何かクラブにでも入ろうと思ひ、熊本学生セツルメントクラブ連合に入った。このクラブは熊本市内のすべての短大大学が参加するクラブであった。しかも、大学で学んだ知識技術を地域で生かすという奉仕活動クラブであった。私は入会し、水俣の石飛という開拓部落に夏休み定住し、地域の子供たちや母親たちに勉強や知識、医薬品等を提供した。大変遣り甲斐のあるク

ラブで、この出会いがその後の私の人生に決定的影響を与えることになろうとは夢にも思わなかった。

まず、岩永久次先生との出会いである。熊本商科大学の地域社会学の先生で、本来なら出会うことのなかった先生である。私はクラブ連合の会長になり、研修会を企画した。講師として岩永先生の紹介を受けてお招きした。先生の講演は、大学の授業とは比較にならないほど心のこもった、天草の漁村等のフィールドワークに基づく実践的な話であった。講演後、私は、お礼とともに少し話をさせていただいた。先生が、よかつたら自宅に遊びにおいでと名刺をいただいた。私は、この先生の温かい人柄と実践的内容に惚れこみ、すぐに遊びに行った。

先生はよくきたねと喜ばれ、焼酎を飲みながら長時間歓談した。その後、何回も訪問し

た。ある夜、私は酒に酔い、高校時代から心酔してきた太宰治について思いを語り始めた。すると、突然先生が真顔になり、「梶原、ぐずぐず言わずに、太宰治論でも書いてもってこい」と言われた。

私は、泣きながら自転車で帰り、「よし、書いてやるぞ」と心に決めた。それまで、自分が太宰論を書くなど夢にも思っていなかったが、決心して書き始めた。幸い太宰全集は全部読んでおり、好きな文章はノートにとっていた。

数か月後、徹夜も数回やり、百四十枚の「太宰治論」を完成し、私は喜んで先生宅を訪ねた。先生は、本当に書いてくるとは思っておられなかったのか、驚いて「おう、本当に書いてきたか、よし、今日はお祝いだ」論文を神棚に上げられて「今日はお祝いだからとこんと飲もう」と二人で夜遅くまで痛飲した。

セツルメントクラブとの出会いは、もうひとつの出会いを生み、現在の妻と出会い結婚することになる。

大学四年のとき、全国で大学紛争が巻き起こり、バリケード封鎖で大学が休校になった。私は、これはチャンスだと思い、休学届を出して、親友とともに憧れの東京に出た。

日雇い労働やキャバレーのチラシ配り、塾の講師などのアルバイトで何とか食いつないでいた。生まれて初めて、生きること、食うことの大変さを痛感した。涙ながらに食事した。小学校以来、演劇に関心をもっていたので「歴史座」という小さな劇団の研修生として半年訓練を受けた。しかし、自分の才能なさに気づき、演劇の道はあきらめた。

さらに私は、大学三年の時、熊本の古本屋で、たまたま吉本隆明の「異端と正系」を読み、彼が敗戦体験にこだわり戦後を真摯に生

きてきたことを知り、吉本の本を買いあさり、ファンになっていた。私は、ぜひお会いしたいと思い、恐る恐る電話した。吉本は気さくに応対してくれて遊びにおいでと言われすぐに自宅を訪ねた。私は太宰論を持参していた。後日、吉本さんから電話があり、いい作品ですから「試行」に掲載してあげますと言われて私は小躍りした。この論文は、連載終了後しばらくたってから二〇〇三年初めて自費出版した。二〇〇四年には「吉本隆明論」も出版した。太宰も吉本も、人生最大の恩師となったが、恐れ多いのでこの列伝からは割愛した。

一年後、復学した私は、はじめに授業を受け、卒業論文を書いて翌年卒業した。驚いたことは、同級生たちは皆、一年間授業も受けず卒業も書かずに全員卒業していた。私は、政府国家権力の本質を垣間見た気がした。

## 五、社会人時代 川喜田二郎先生 — KJ法移動大学運動との出会い

私は卒業後、どこに就職するかいろいろ迷った。好きな「読み書く話す」ことが生かせる職業はないかと探し、新聞記者に応募した。読売新聞西部本社に就職が決まり、私は、小倉で新入社員研修を受けていた。

その時に、突然高校時代の親友から電話があった。彼とはいっしょに休学して東京に出て復学した仲である。彼は東京時代に、川喜田先生に出会い、KJ法と移動大学運動に熱中していた。私も話を聞き関心を持っていた。

彼は広島大学に復学し大学院に進学していた。内容は広島島の宮島で移動大学を開催することが決まったが、プロジェクトリーダーをやってくれないかという依頼であった。私は、前年に彼の誘いを受けて、沖縄移動大学に参加していた。川喜田先生にも会っていた。野

武士のような風格を有しとても大学の先生とは思えなかった。友人は一週間で返事をしてほしいと電話であった。それから私は一週間悩んだ。せっかく苦勞して新聞社に入社したが、それほど新聞記者にあこがれていたわけではない。親友の薦めるKJ法移動大学運動は、大学改革運動であり、新しい時代社会を創造するチャレンジである。私も現状の大学には大きな不満をもってきた。私のヤクザな血が騒いだ。一週間悩んで、私は、新しい時代に賭けた。辞表を提出し、小倉から列車に乗り込んだ。広島に着き、友人の家に寝泊まりしながら、新しい仕事について議論した。

まず移動大学広島本部の事務局作りから始まった。広島YMCAという大きな組織が全面的に協力支援してくれた。そのトップが後半の人生を左右することになる相原和光総主事であった。

川喜田二郎先生と相原先生が私の成人期の大恩師となった。私はまず、KJ法に関心を持つ人々に声をかけ「広島KJ法研究会」を立ち上げ、移動大学の運営母体にした。この会は、広島県市の意欲的な職員や大中小企業の経営者、広島家庭裁判所の調査官、広大生等20人余が集まり、広島移動大学開催に向けて精力的に活動を始めた。相原先生が会長と大学のキャンパスリールダを快く引き受けてくださり、本部事務局も無料で提供してくれた。かくして、第十一回広島移動大学は宮島をキャンパスにして盛大に開催され、成功裡に終了した。

## 六、YMCAとの出会い・相原和光先生

翌年の春、相原先生から私と親友にYMC Aで働かないかというお誘いがあり、移動大学終了後の予定はなかったから二つ返事で就職した。すでに深い信頼関係、人間関係がで



きあがっていた。

川喜田先生と相原先生も、肝胆相照らすという大人物の風格を有していた。

川喜田先生とはその後亡くなられるまで親しく指導していただいた。時々東京出張のうちに自宅を訪ねた。後年私は、情報化社会のツールとしてのKJ法をテーマに広島でKJ法学会を主宰した。先生とは亡くなられるまで、親しくさせていただいた。

広島YMCAでの仕事は実にチャレンジングであった。私に向いた仕事が次々と与えられた。

まず、最初は、研修センターの経営であった。広島市から二時間山奥に行ったところに、広島では唯一の温泉地があった。湯の山・湯来温泉である。

その近くにあった小学校が閉校になり、広島YMCAが買い取り、青少年向け宿泊野外

活動センターとして使用していた。夏だけの開業で、地元の方独りだけが管理人として働いておられた。相原総事に、ここを年中使用される研修施設として発展させて赤字を解消してほしいと言われた。

私は早速、広島市内から湯来町に移住した。学生時代のセツルメント運動以来、定住定着は私の信念であった。私は地域の人々と交流しながら、発展計画を作成した。それは、子供から大人までの生涯学習センター構想であった。幸い、KJ法は、移動大学運動とともに、社会の注目を浴び、全国的に有名になりつつあった。その機会をとらえて、私は企業をターゲットにして新入社員から管理職までの研修企画やセミナーを企業や団体に売り込んでいった。利用客はうなぎのぼりに増加し、利用者が激増した。ちょうど日本は高度経済成長期に突入していた。5年後には、古い校

舎を壊し、近代的なヨーロッパ風の研修センターに生まれ変わった。

次に事業部で、総合開発研究所を立ち上げ、21世紀を科学する情報誌「ザウエイブ」を年6回発行し続けた。時代は高度情報化に向かって大きく変化していた。私は、現在のネットカフェの前進である「情報喫茶アスキス」をオープンさせた。出版社からの依頼で初めて本を書き出版した。

数年後、私は専門学校を担当することになった。専修学校制度ができて間もなくのころである。私は学生募集に力を入れながら教育内容と教育方法の研究に尽力した。時代の変化の中で、実践的職業教育機関として、全国的にブームが起きた。順調に生徒数が増え、2冊目の本「専門学校教育論」を書き出版した。同時に日本語学校も担当するようになり、英国、中国に姉妹校を作りたびたび相互訪問

を行い交流を深めた。

この間、相原総主事と林辰也副総主事にかわいがっていたとき、私は存分に自分の持つ力以上の実績を残すことができた。

この間、相原先生には、特に可愛がっていたとき、公私ともに親しくさせていただいた。最初のころは、お抱え運転手のように車であちこちに行き、車の中で、先生の人生、生き様ご苦労をたっふりと聞かせていただいた。

大人の風格を持っておられた先生の生涯は戦争を挟んで実にドラマチックであった。私は、先生の太っ腹、キリスト教信仰の深さ、柔軟性、行動力等多くを学ぶことができた。

今回、これを書くにあたって、改めて先生唯一の書「生かされて生きる」(1992年日本YMCA同盟出版部)を読み直した。三十年の温かいご指導を思い出しながら、涙がでてきた。先生の生涯は実にドラマチックで、不

遇の子供時代を経て、戦争で満州に行き、捕虜となりソ連に抑留されたつらい経験等、涙と驚きの連続であった。戦後日本に帰国されてからは、日本YMCA同盟に奉職され、その後広島YMCAの総主事として赴任された。貧しく小さなYMCAを十年余で見事に再建発展させられた。私が入職した時期は、第一次発展が終了し第二次の発展期であった。私は、先生のおかげで実に充実したやりがいのある仕事を経験することができた。

私が学んだことは、物事に動じない太っ腹の根性と、信仰の深さ、謙虚さ、平和への信念、行動力等数えきれない。私のような無力でひ弱な人間が、無事に充実した職業生活を送れたのは、ひとえに相原先生とYMCAというユニークな組織のおかげである。相原先生は二〇〇六年天国に召されたが、私はその直前までご指導を受けた。

## 七、福山YMCA 喜多流能楽師大島政允先生——能謡曲との出会い

一九九八年、私は初めて転勤を命じられた。最大のブランチである福山YMCAであった。福山YMCAはすでに駅前の一等地に五階建てのビルを有し、活発に事業活動を展開していたが、ここ数年足踏み状態であった。

私は、衰退していた予備校事業を閉鎖し、高齢化社会に向けてデイーサービスセンターをオープンさせ、いわゆるスクラップアンドビルドを行い財政の安定化をめざした。同時に、地域に密着するため、さまざまな地域活動に尽力した。その過程で出会ったのが、喜多流能楽師大島政允先生ご一家である。

これが大きな人生の転機となる。福山には全国でも珍しい能楽堂がある。そこで喜多流能楽師大島政允氏とその家族に出会い、謡曲を習い始めた。すでに五十二才になっていた。

きっかけは福山県立歴史博物館十周年記念行事として開催された「音楽で綴る福山千年の歴史絵巻・瀬戸内の夜明け」組曲にナレーターとして出演したことである。これは大島先生の奥様である大島泰子さんの企画であった。福山に転勤することがなかったら、私は能謡曲に出会うことも、日本の伝統芸能文化に関心をもつことも、日本語の美しさに感銘を受けることもなかったであろう。

毎月四回、仕事が終わって夜に自転車で能楽堂に通い続けた。漆黒の闇の中で大きな声を出しながら家に帰った。初めて出会う謡曲は六〇〇年の歴史の重みを感じさせる魅力的な日本語の美しさに満ちていた。謡曲の典拠となっているのは「平家物語」や「古今和歌集」「万葉集」をはじめ五十以上の文献にのぼる。中国の古典も三〇以上ある。謡曲は美しい日本の伝統的言語文化の宝庫である。その

名文を、腹式呼吸によって大声で謡う。身体の中に五七五調のリズムが心地よく響きあう。謡は全部で二百曲以上あり、私は全部で百曲の稽古をさせていただいた。先生にはいつも優しくご指導していただき、奥様や三人の娘さん、後継者の大島輝久さんにも親しくさせていただいた。個人的にも食事に行ったりした。そして、異例の速さで教士免状をいただくことになった。六〇歳の時である。

私は、多くの能を鑑賞し、謡を稽古し、能舞台で地謡も務めた。台湾でもアジア太平洋芸術学会で「黒塚」の地謡を務めた。

私はこのような能謡曲体験を通じて、次第に日本語の美しさと伝統的語り音楽に興味を持つようになった。団伊玖磨の「日本音楽史」を読み、お経・声明から始まる日本の豊かな語り音楽の魅力に取りつかれ、小唄・長唄・端唄・浪曲・浄瑠璃等、CDを買ってきて真

似をした。私は、YMCAという国際教育団体で働いてきたから、海外には十五カ国以上訪問したが、日本の伝統文化芸能には全く無知であった。能謡曲に出会って、私は初めて日本人になったような気がする。

定年退職後、私は妻の故郷である鹿児島県出水市に定住することを決心し、謡曲教室を開いた。わずか三名であったが一生懸命指導した。鹿児島謡曲連合会及び出水市文化協会に入り、毎年秋の発表会に出演してきた。

二年後、大学教授をしていた高校時代の親友から東京の日本教育大学院大学の仕事の話があり、私は初めて東京で三年間働いた。多忙な仕事の合間を縫って、私は毎週日曜日に浅草に通った。そして、浪曲、浄瑠璃、新内節を鑑賞し、習いに行った。目黒にある喜多流能楽堂にも月数回通い、東京在住の大島輝久氏に稽古をつけてもらった。東京は日本最

大の現代都市でありながら、伝統文化芸能の宝庫である。江戸時代が生きており、私は日本の伝統芸能文化を堪能した。私は長年、教育の仕事をしてきたので、和文化教育大会でも発表し、その成果を「伝統文化教育論―日本の語り音楽の魅力」(二〇一一年B5六十一P)として小冊子を発行した。東京の三年間は私にとって人生後半の最大の充実した思い出である。

### おわりに

七十有余年生きてきて、改めて、出会いと恩師の偉大さを再認識した。本当は、私の精神に決定的影響を与えた太宰治と吉本隆明の二人も大恩師に加えるべきだが、恐れ多くて割愛した。二人については、「太宰治論―選ばれしものの悲哀とリリズム」(二〇〇三年文芸社)「吉本隆明論―戦争体験の思想」(二〇〇四年新風舎)として出版しているので。参

考にしていただければ幸いである。森信三先生は、生涯のうちで、人は必要な人と遅くもなく早くもなくちょうどいい時に出会おうと言っておられる。こうやって七人の恩師を振り返ってみると、まったくそのとおりだなと感じ銘を新たにす。七人の侍と副題を付けたのは、これらの恩師は皆、日本人としての誇りと愛情と気概を持った武士のような風格を備えていたからである。私も大きな影響を受けて、精一杯努力してきたつもりだが、私を恩師と思ってくれる人が何人いるだろうか。はなはだ心もとない。

二〇一九年の正月、出水市文化協会の新年会で、「夕鶴俳句会」の白男川孝仁氏に出会い、遅まきながら俳句を学び始めた。その出会いについては「能謡曲と俳句」に詳しく書いた。

この俳句会で出会った、「河鹿」主宰の淵脇護先生は、元教師で、毎回適切なコメント

をいただき、人生最後の八人目の恩師になりそうな予感がしている。

私の印象を、初めて「博覧強記」と評していただき、喜んでいたが、よく調べてみると、頭でっかちという意味もある。出会ったばかりなのに、鋭い指摘だと感服した。私の俳句は、確かに頭でっかちなのである。

これから先生にしつかり師事して、少しでも感性を磨き、俳句の腕を磨きたいと願っている。

（出水市文化協会理事、喜多流謡教士）

